明治期女子教育者にみるアメリカ文化の影響

碓　井　知　鶴　子

前年度の紀要論文において，筆者は外国人宣教師による直接的な異文化の導入と接触が女子教育の局面においてどのようにおこなわれ，どのように日本社会に定着していったかについて論じた。さてこの小論においては視点を変えて，日本人を通じて異文化がどのように摂取され，日本土壌の上にどのような形で導入されようとしたかを考えてみたいと思う。同一の文化を伝えるにしても，外国人が直接その文化を伝える場合と，日本人が留学の経験によって異文化を摂取し，帰国後に母国でその文化を伝える場合とでは決して同じ行為とはいえない。日本人の精神に流れている伝統が異文化の摂取と導入の上にどのように作用しているかなどの問題を考えてみたい。以下に，木村熊二と成瀬仁蔵における留学経験の実践化における諸問題を考え，さらに，実際に留学はしていないが，木村熊二との接触や書籍を通して十分にアメリカ文化を吸収した巌本善治の場合をあわせて考えたい。

第一節　木村熊二と明治女学校の場合

(1)熊二の留学とキリスト教との出会い

明治女学校といえば，巌本善治の主宰した学校というふうに多くの人に理解されてきた従来の考え方に，鋭い批判のメスをいれ，反証したのは，東京女子大学教授，青山なお氏による膨大な研究，「明治女学校の研究」である。[註1] 青山氏によるこの研究は，元来は，「女学雑誌」を綿密に分析することによって，明治女学校の実体をつかもうという意図をもってはじめられたのである。しかし，その研究途上で，信州小諸の木村熊二の旧宅，水明桜の書斎にひそんでいた一群の文書，つまり，青山氏なづくるところの，膨大な，「木村熊二文書」を発見するにいたって，思わぬ方向に進んだ研究論文である。青山氏の研究によって，明治女学校の設立の基盤には，木村熊二とその妻，鐙子の思想と信仰と努力があったことが明確にされ，巌本が，明治女学校の精神的・思想的な生みの親であるという従来の考え方への駁論がなされたことは注目にあたいする。実に，巌本善治は木村夫婦の築いた土台のうえに，花を咲かせたいわば後継者であった。この土台には，木村熊二の13年間にわたる米国留学生活という経験が存在していたのである。青山なを氏は，このことを端的に次のように記している。

「巌本による明治女学校の教育の原型に，木村鐙の存在を思ひ，さらに説得したとも見えないながら，明治女学校の方向決定に力強い影響をあたえている木村熊二の思想や信仰に思ひいたらずにはをられない

のである。[註2]」

それゆえ，ここでまず，木村の明治女学校設立に至る経歴を承知しておきたい。

木村熊二は，昭和2年，83才の高齢で永眠したが，70才すぎに，自らの告別式にそなえたかと思われる履歴書がある。三人称で書かれた履歴書は次の如くである。

「木村熊二君履歴

君本姓は桜井，父は一太郎君と称す累世出石藩の儒員たり君は弘化二年正月廿五日京都御池通にて生誕し五歳但馬出石に到り八歳出京して叔桜井三郎君に養子，十歳聖堂へ通学し十五歳河田迪斎の塾に入り十八歳聖堂寄宿人を命せられ佐藤一斎安積良斎に親炙して経書を研究す。木村氏嗣なきを以て十八歳の頃同家の養子となる木村家は御家人と称して門地挙らず将軍家茂公の代に君は殊遇を受け拝謁以上の家となるを得たり維新後君が官に就かずして生涯を送りたるは始終を全ふせんとするの意に外ならす

維新の際は幹事役勝安房の手附となりて東西に奔走せり官軍の探偵の密なるか為め身をく[ママ]地なく暫時静岡に逃る外山正一君の奨励によりて米国へ脱走することとなりたり米国に在ること十三年帰朝後は基督教を称道し傍ら塾を開きて育英に従事せり君は他より補助を受けす自働の余資を以て生徒を養ひ弊衣麁食に甘んじて生涯を送りたり当時先妻田口鐙子君の内助甚だ多かりき

君は官途に就く可き機会はありたり在米中紐育領事高橋真吉君は領事館へ入りて活動すべしとて勧誘せられた帰朝後塩田三郎君は外務省へ奉職する事を慫慂せられ神田乃夫君は高等学校生徒の監督たる事を奨められた田口卯吉君の如きは攻界へ入りて活動せしめんとて頻に周旋せられたれど君は断然諸氏の好意を辞された君常に云ふ「吾は旧幕の遺臣であって明治の世には無用の者である社会へ対する仕事は土台石の下にある石の様に人に知られない仕事をすれば其でよいのだ」と

故に君の名は世間には知られてをらぬ間節[ママ]に君か社会へ尽された事は当時君と交りた少数の人士と塾生の外に知る者はない（後略）[註3]」

文中に先妻田口鐙子とあるのは，田口卯吉の実姉である。このような関係から，明治女学校創立にあたって，強く援助したのが田口卯吉であり，また，田口の親友である島田三郎なのであった。そして彼等は，旧幕臣，民権論者，キリスト教的人道主義者という点で一致していたのである。

この木村が留学したのは，明治3年，森有礼が少弁務使としてアメリカに赴任する際に，一緒に連れていった留学生の一員としてであり，その際，木村は若干23才の青年であった。彼がニューヨークで身のふり方に苦慮していた時，全く偶然にミシガン州ホーランド，(Holland) のホープ大学（Hope College）の校長，フィリップ・ヘルプス（Philip Phelps）に出あったことがきっかけとなって，この後，8年間を Hope College で過したのである。彼は，明治12年に Hope College を卒業し，その後，ニュー・ジャージー州のニュウブリンスウィックの神学校に入り，明治15年，牧師職の免許と聖職按手礼[註4]をうけて帰国したのである。そして帰国後は，「旧幕の遺臣」，「明治の無用者」に終始するため，「人に知られない」，「土台石の下にある石の様な」教育事業を仕事として選んだのである。

木村はヘルプスによって，キリスト教に導びかれ，明治5年には洗礼をうけるに至るのであるが，それは丁度，内村鑑三がアマスト大学長シーリーに出会うことによってキリスト教の真髄にふれえたのと類似していた。日本人がキリスト教と出あう時は常にそれまでの自己の精神的基盤をなしていた儒教との対決があったが，木村の場合は，ヘルプスという生きた人格を通してこの対決がおこなわれ，キリスト教が儒教に代って選択されたのであった。彼はそのことを次のように記している。

「余はヘルプス師が悠々迫らず綽々然として余裕あるの壮貌を見る毎に仰慕の念は禁する能はす，況して其胸間より迸出する無限の愛，師を繞囲する温雅の風に接着せは万斛の愁思は恰も死灰の如く消うせて罪累と夢想の為めに炎の劔もて楽土を逐れたる自己か身も，再ひ水浄く草緑りにして尽せぬ春ある別天地に消遙する心地せり，余は少壮より鴻学碩儒の門に遊ひたれど斯かる品位の高き人に遭遇したることなし」[註5]

このような契機をへてキリスト者に生れ代った彼は，しかし，伝道者の道をすぐに選んだわけではなかった。彼は技術者となって日本の国に益しようとしたのである。しかし，ヘルプス夫人が木村に次のように説いて伝道者になることを勧めたのである。

「日本にて鉄道を布設し電線を通し橋梁を架設し道路を開通する等の事業は今後益々頻繁ならんとす」[註6]

「快を一時にとると，食に良肉なく居に定処なく東馳西走して十字架の教を説き衆人を堕落より救ひ，敬神愛民の大傑ワシントン，リンコルンの如き人物を邦家の為めに養成するとその目的の大小高卑は君よろしく珍重（ママ）に採択せられよ」[註7]

このような過程をへて，帰国後の仕事について悩み苦しみながらも，結局，牧師職の免許を得て帰国したのであった。技術者となって帰国していれば，「富貴栄華を一身にあつめて快を一時にとる」ことが出来たにちがいない木村が，ヘルプス夫人の「されどこれ等（鉄道・電気・土木事業）は文明の外部を装点するの具にすぎず」という言葉に動かされたのであろう。いいかえれば，木村は，アメリカの物質文明とその基盤になっている精神文化とをはっきり見分け，日本の人々にこの後者の考え方を伝えることに自己の天職を見出したのである。木村熊二の帰国後の明治女学校設立に至る背後には，このような一留学生としての異国の孤独の中での精神の再生があったのである。これは，日本の社会の欧米に対する認識，つまり「欧米の糟粕を嘗め物質上の進歩に垂涎」[註8]する傾向のある認識とは根本的に異なったものであった。それゆえ，日本の鹿鳴館時代の一般日本人の受身的な西洋心酔，皮相なキリスト教観を，帰国後いやという程みせつけられた木村は，その誤った異文化の摂取方法と態度に少なくない憤りを感じたと思われるのである。後にものべるように，女子教育を実践する上に彼がもっとも強調したことは，「外国女子の教育法」そのままでない女学校の設立ということであった。彼が帰国した明治15年は，あたかも鹿鳴館時代を目前にひかえていた頃であったから，前に述べた東洋英和女学校的なきらびやかなミッションスクールに，一抹の危惧と不安を感じたのであろうかと

思われるのである。

(2)木村と北米の婦人たち

木村がキリスト教に回心するうえにヘルプス夫妻が決定的な影響を与えたように，日本の女子教育に関心の目を向ける上には，北米で会った数人の婦人たちが，意識すると否とにかかわらず，彼に影響を与えていたように思われる。青山なを氏の紹介するいわゆる「木村文書」中には，熊二が滞米中に故国の妻鐙子に与えた手紙が32通あるが，その中で彼はしばしば米国における女性の実情について述べ妻鐙子を啓発しているのである。例えば，明治5年6月6日附の手紙には，「日本の女は無学に而(ママ)，当地の女とくらべ候へは実に気の毒の様に存じ候」と述べている。[註9] また米国における女子教育や彼我婦人論の比較を論じたりしているのは，鐙子が一人息子祐吉を育てる責任の重さを思いやり，熊二が不十分ながら，父親の責任を果すべく鐙子を導いたのであろうと思えるのである。鐙子が息子の成長につれ，その教育が自分だけでは手におえないことを訴えた返事に，熊二は次のように記している。

「祐吉近々生長ワンハク，小学校江日々かよい小学免状をとり候由，大安心いたし候。当国にては小供しつけ方と，家を奇(ママ)れいに守り家中の行儀作法を正しくする事，ハイフの役(ママ)にて，主人の決してとんじゃくせさる所なり。西人ハイフをもとむる美をとらず，只品行と読書をえらむのみ。今御前事たとひ読書ハ無えといへども，人の行，夫(そ)の善悪は元より承知被致候ところ也。僕決して御前江読書なきをせめず，ただ品行を論せんとす，如何となれは，ハイフは家のはしらにひとし，もし柱がよわくて腐り候へは，家のくづれ近にあり。……ヘルプス氏のハイフ，見て僕に話候に，子供をそだて候事は，女の第一大役也。夫(そ)のむつかしき言語に陳かたしと。……日本人の説に，外国の女は利様にて日本の婦人は愚といふものあり。決してこの理なし。僕当時友人中多分女も有之候へ共，学問の善悪はしばらく置て，品行の上にて甚感心いたし候もの，十人に一人也。……」[註10]

一方，鐙子は，夫からアメリカでの婦人のあり方を聞くにつれ，わが身のそして同胞の女性の解放されない状態を思い，生来，勝気で利発な彼女の向上心が刺激されていったと思われる。このような彼女の精神的経験が，後に熊二と共に，女学校設立，経営する基盤となったのであろう。

さて，熊二の身辺にいた女性達は，「木村文書」に残る手紙類から判断すれば，主として，ヘルプス校長の娘達や，ディビッドマレー（David Murray）夫人などがあるのである。熊二はヘルプス一家とは，家族の一員のようにして親しんだが，その二人の娘たちは共に，ホープカレッヂでの彼の下級生なのであった。ホーランドを去って，ニュージャージー州に移ってからこの二人の娘たちが彼にその後の大学生活について報告する手紙が残されている。

周知のように，19世紀後半におけるアメリカの女子高等教育は，順調に発展の途上にあり，このホーランドというミシガンの一開拓村におけるホープカレッヂも既に男女共学にふみきっていたのである。1879年，妹娘のリッジーは大学における女子学生について次のように熊二に

知らせている。

"There are at present twenty-seven young ladies, including the old ones, attending the College. All of these excepting two reside in the city. Eight of them are in the "D" class, nine in the "C", three in the "B" and same five, including myself in the "A" class, and the Fannie and Trude, in College complete the twenty-seven"[註11]

この手紙により，当時のホープカレッヂには，27名の老若あわせた婦人学生のいることがわかるのである。このような，自由に男子と同席して高等教育をうけている女子学生の生活をじかに見聞している熊二にとって，日本の女性の，大学はいうに及ばず女学生すら十分に与えられない状況が強く迫ってきたとしてもうなずけるのである。

また彼は，神学校在学当時，ディヴィド・マレー夫妻による経済的援助を受けたが，これの具体的な手紙のやりとりは，すべてマレー夫人を通しておこなわれた。ディヴィド・マレーは明治6年から明治11年まで，わが国の文部省学監として働くため来日し，明治初年の教育制度整備のため尽力したことは，周知の事実である。マレー夫人は，明治13年（1880）に，はじめて熊二に年100ドルの学資金を与える旨の手紙をしたためている。マレー夫人の手紙の中には，The best way we can help Japan now is by helping you と記されている。[註12] 熊二が後に生涯の恩人の名をかきつらねた，「知己人名録」の中には次のようにしるされている。

ミッセスモーレー　米国ニウブランスウィッキ学校に在りし時，学資金等を与へたる人なり。

このようにして熊二が自らの経験によって，米国婦人の社会的な地位と実力を知ったことがうかがわれるのである。またディヴィド・マレーが日本で女子教育の重要性，特に女教師養成を説いたことから，女子師範学校設立が実現したことなどを考えあわせると，このマレー夫妻が木村を援助したことは，結果的には，日本女子教育史上，興味ある結びつきだといえるのである。北米の婦人たちとの親密な接触や見聞は，熊二の帰国後の仕事の上でぬぐいきれない重さを残したといえよう。

(3)「外国女子の教育法」そのままでない女学校の設立

アメリカにおける経験を経て得た女性観はそのまま，彼の帰国後のわが国の女性の恵まれない状態にたいする関心と同情とに変っていったように思える。それと同時に，日本に来ている宣教師がその伝道と教育の事業を遂行する上に日本を理解することあまりに少ないことに憤り，他方，日本社会の外国文化摂取の上での軽薄さ，皮相さなどを敏感に感じている。彼によれば，宣教師は，日本を知らぬこと多く，反対に，日本人は，西欧文明の真の基盤となっている精神文化を理解すること少なかった。このような状態で進んでいっていいものだろうかという懐疑に悩まされていた。彼の文明批評を示す日記が残されている。

明治17年1月2日

下谷和泉橋辺上野広小路辺ヲ散歩シテ，街中ノ景況ヲ看一看セシニ商法ノ不活発ナル去年ノ暮ト同ジ有様ナリ実ニ春ヤ昔ノ春ナラズ文明開化ヲ上部ニ飾ル明治ノ春ハ左コソ思ハレテ最ト哀レニ堪ヘケリ[註13]

彼はこの皮相浅薄な文明開化の雰囲気を否定して進んだ外国文化を自主的，自発的に摂取することを願って明治女学校設立に着手したのであろうと思われるのである。木村熊二の筆になるといわれている「木村鐙子の伝」の中で明治女学校設立の動機を次のようにしるしている。

「木村熊二氏帰朝の後，深く我国婦人の教育の欠くるに感ずる所あり。小学以上の女学校は東京府内に在りてすら数校に過ぎずして他の地方に至りては殆んど是を見る事稀なり。而して其是あるは官立府県立にあらざれば海外伝道会社の力に成る者なり嗚呼(ああ)海外の人其自国に尽すの余力を他国に及ぼして人類の改進を助くるなるに我国人は恬(てん)として之を度外に置きすこしも羞恥の感を発する事なく世上富豪を以て自から許すの人も或は其自家の奢傲(しゃし)をほしいままにし或は虚栄を買ひて無用の財を浪費するに至りては万金を投して顧ざるも我国後代子孫の為めに文明を買ふの資財を用ゆるに至りては嘗て之を意に経さるが如し是れ国家の為めに恥べき事なりと雖も風習の然らしむる所一時に之を如何ともす可からず旦此の如き習を変じて欧米の美風に進ましむるは要するに口説(くちさき)の能(よ)くする所に非ずして唯有志の人難きを冒(をか)して躬行の例を示すに如かずと熊二氏此説を挙けて之を鐙子に語りしに是より先鐙子(した)下谷会堂に於て婦人会を開き婦人風俗の改良を協議せしが其智徳を併育(あはせいく)するは西教を以て婦徳を涵養する。学校を起すに如かすと深く其の必要を感し居りし際なりければ悦(よろこ)んで熊二氏の説にしたがひ遂に他の同感者と相計りて明治女学校を設立し自ら其幹事となりて校中の庶務を処弁し寄宿舎に泊して生徒と眠食を共にし其幹理(かんり)に労せり……」[註14]

「帰朝の後，深く我国婦人の教育の欠くるに感ずる所」のあった熊二は，上に述べているように妻鐙子の援助を得て実践にのり出したのであったが，その周囲の協力者となったのは，木村夫妻の属している下谷教会教会員であった。[註15] 青山なを氏はこのようにして出発した明治女学校の特異性を次のように記している。

「明治女学校は木村夫妻を中心とした同志のあつまりで，真摯なキリスト教信仰を支柱とした信頼と友愛とに結ばれた親密な団体が母体であるといってよいやうに思はれる。英語教育にはじまった宣教師の女塾を発端とするミッションスクール創立事情に比べるとキリスト教主義教育に対する日本人の態度において，はるかに，自発的，自覚的であって，これが将来に残した影響はすくなくないであらう。」[註16]

後に木村熊二が明治女学校を去って，明治20年には巖本善治が教頭となり，さらに明治25年には校長となって明治37年までその地位にとどまり，事実上の権力を握るのであるが，その間巖本は，木村の思想――「外国女子の教育法」そのままでないキリスト教主義女子教育（宣教師的教育の否定）――を忠実に継承して明治女学校の独特な「中道を行く教育」を守りつづけたのであった。明治女学校における巖本の功績は何人も否定しえないものであるが，木村熊二の13年間にわたる留学経験にもとづいた思想と信仰を基礎としていた学校であることは，もっと強調さるべきであろう。

では巖本と木村とはどのような出会いをしたのであろうか。木村は明治15年に帰国した後に小さな私塾を家で開くのであるが，巖本はそこに通う学生の一人，つまり木村とは，師弟の関係なのであった。そして，明治16年に下谷教会牧師となった熊二によって，巖本は洗礼を受けているのである。[註17] 木村の事業としてはじまったこの学校経営が，では何故木村によって経営されず，巖本に引き継がれたのであろうか。その原因は明確でないが，ここに一つの遠因と思はれるものが，考えられるのである。それは，彼と伝道会（mission board）との関係である。このことは，当時女子教育のあり方について伝道会と，日本人との相入れない考え方を示す例としても注目すべきであろう。

そもそも木村は，帰国する際に得た牧師候補者の認可と按手礼は，ニュージャージー州のニューブランスウイックの改革派教団（Reformed Church in America）の試験をうけたのであり，帰国に際しては，この改革教派から日本に派遣する形をとったといわれている。そのために彼は日本における伝道活動に関しては，伝道会の指示に服さねばならなかったのである。[註18] そのため，彼が明治女学校経営をはじめたことのために，伝道会と対立することになるのである。つまり，明治女学校設立の翌年（明治19年2月），改革派系の伝道会（Reformed Church Mission）は，木村熊二の要求した明治女学校校長となることを拒否し，ただちに，宣教活動のより要求されている名古屋に教育と伝道事業のために赴任することを命じている。宣教師の考えでは，明治女学校の意義を否定はしていないのであるが，日本全体の布教活動とその要求から考えれば，熊二が明治女学校のためだけに専念するべきではないし，伝道会としては人的にもそれだけの余裕がないのだと主張しているのである。伝道会を代弁して，バラ（J. H. Ballagh）は，上にのべたような事情を熊二に訴えた英文の手紙が残存している。[註19] 伝道会は何といっても伝道活動至上主義であり，熊二のように，宣教師のやり方に同意できず，自らの思想にもとづいた女子教育を施そうとする者にとっては，伝道会との疎隔を生むことは当然であったと思われる。東京都内の女子教育事業は勿論必要ではあるが，他の地方への伝道普及がもっと必要なことであるとする考え方の，伝道会に対して，明治女学校の新設の意義や教育方針の評価などについての理解は望むべくもないことであったと考えられる。さらに伝道会は熊二が東京で行う教育活動には，一切援助できないことを明言している。それをバラは熊二の手紙の中で次のように報告している。

"The Methodist Mission hopes to start in woman's work at Nagoya before long if we do not. We ought to do so as we have several very good girls from there, good scholars and one a graduate. Their relative would be delighted to have them return and enjoy in educational work. Either boys or girls, school work of Nagoya would be very hopeful. …… In view of all our past labor on Nagoya, its present and pressing need, it is very plainly your duty to go if you are to work in union with the Refo Church Mission.

Yesterday, after the request to allow you to become Principal of the Meiji Jogakko Tokyo was

not acceded to, the Mission passed a Resolution that in view of the urgent needs of the Mission work elsewhere we could not sustian your labors in educational work in Tokyo and that their request for you to take up Christion work in Nagoya be renewed. The Mission did not consider your present hopeful work as useless, they were glad to hear of the prospects of another good school in Tokyo and of its excellent supporters ; all they decided was they could not afford your services for that purpose.[註20]

改革派宣教師団が，このように強い調子で熊二に名古屋赴任を求めている一つの理由には，上の英文手紙にもふられているところの宗派間の伝道上の競争があったのではないかと思われるのである。もし今すぐ名古屋で改革派が布教，伝道と育英事業をはじめなければ，メソディスト伝道会が教育活動をはじめたい希望を持っているのである。改革派伝道会としてはやはり自己の勢力を拡大させたいというディレンマがみられるのである。

結局，いかなる事情のもとにか木村は，改革派伝道会の命令に服さなかった。そして，名古屋には，明治21年にはメソディスト派の女学校である名古屋清流女学校が設立され，翌明治22年には南長老派の金城女学校が開設されており，改革派系の女学校はついに設立されえなかったのである。改革派伝道会の立場からすれば，伝道教育の処女地としての名古屋に他派を制して，その勢力を一日も早く拡張することを欲していたのであるが，結局，実現しなかったわけである。名古屋伝道のために白羽の矢をたてた木村熊二は，伝道会の意に反して，東京では既に，当時，数十校もの mission school がある中を，[註21] もう一つの女学校をつくり，経営に従事したわけである。

このような伝道会と熊二との誤解と疎外とは，伝道，教育についての考え方の根本的な相違にもとづいていたといえよう。熊二が後に東京での伝道活動をやめ，明治女学校を巖本にゆずり，明治25年には既に遠く信州に退き，ささやかな塾を開くことになったのも，明治女学校をめぐるこのような伝道会との対立にねざしているかもしれないとする青山なを氏の指摘は妥当であろう。[註22] 熊二と伝道会との対立の問題が教えることは，当時の外国文化移入の上には，おなじキリスト教伝道という目的をもっていたにしろ，宣教師の考えと日本人キリスト者の考えとでは，しばしば対立したのではなかろうかということである。熊二は，この単なる一つのケースにすぎないであろう。彼はこのような対立の渦の中で犠牲となったとも云えよう。何故なら明治女学校は，巖本という後継者を得て花開いたが熊二は13年間の留学生活の成果を，日本社会に十二分に還元しえたであろうかという疑問が残るからである。

ともあれ，ミッションスクールに対する批判的精神から生れた明治女学校は木村退陣の後もその創設時の精神を失うことなく独自の校風を生みだすのであるが，それは主として巖本善治の功績によるものであった。巖本は英学に偏より，伝道者育成になりがちのミッションスクールを批判し，政治や社会の流行によってその教育方針を左右する官公立女学校とも区別された真に「中正の道」を行く教育の必要をくり返し「女学雑誌」上で説いている。[註23] 彼が木村熊二の

創設時の精神を最後までまげずに，その教育観の支柱として貫いている様相は，おどろくばかりである。明治25年，時あたかも，復古主義的ムードが支配し，古来の婦徳の再認識されはじめた頃，巖本は，文字通り，時流に超然とした教育の信念を明治女学校生徒に次のように表明している。

「学問はアナタ方が一生涯なさるべきもので即はち完全なる人物となりをはらるる迄は，凡そ学問の卒業と云ふことはありますまい。一生の目的は完全の人物となるにありますれば，事業とか商売とか，炊事とか割烹とか，仕事するとか云ふものも皆悉(ことごと)くこの目的に副はなければなりますまい……夫故，アナタ方は今後，夫々適する所にお入りなさい。何処にでも学問ができます……」[註24]

このような，明治女学校の精神の源泉を木村熊二に求めて，青山なを氏は，「もとを探れば出発時の思想的練達があって，思想的風雪にたえ得る堅実な基礎となったものであろう」[註25]と述べている。

私は，今まであまりにも長く木村熊二のことにふれすぎたかも知れない。しかし私の意図したことは，従来の明治女学校を論じる者がその栄誉を巖本善治に帰することあまりにも多かったこと，そして私自身も長くその論に組していたため，ここでもう一度，その思想の源泉を確認したかったからである。そして，キリスト教という外国文化を日本に伝えるためにも，その伝達者が日本人留学生であるか，或いは，宣教師であるかによって，その教育観，教育形態，学校経営などに顕著な対照をみせることになったのだということを追求しようと試みてきたわけである。

明治女学校は，結局，経営難のため，明治42年に廃校に至り，その24年間の格闘の幕を閉じるのであるが，それに対して，明治20年代の危機をのり越え得たミッションスクールは，多く継続し，太平洋戦争という第二の難関時代を経て，現在にまでその命脈を保っている。この対照をみるとき，ミッションスクールの財政的基盤は絶対的強味であったことが理解できるし，又，同時に，「明治女学校の高遠な理想と，それに比べて不似合に貧弱な経済力との格闘」という決定的弱点，つまり当時の日本社会の地盤の弱さを考えさせられるのである。

では木村熊二によってはじまり，巖本善治によって引き継がれた外国文化の一つの摂取の方法と形態は，歴史に生き残りえなかったのであろうか。教育効果の測定という問題は，女子教育の場合，男子教育の場合程，明確にその結果ははかりがたい。何故なら男性はそのうけた教育を社会の中で生かし得るが，女性は従来，教育を社会の中に還元することが少なかったからである。巖本もこのような女子教育の性格を承知しており，それを「婦人の潜在的生態」という言葉で表現している。[註26]明治女学校の場合でも従来，多く指摘されてきたように，何らかの意味で社会的な仕事を残した者によってその教育の効果を測る方法しか，目下のところ残されていないようである。例えば，相馬黒光，自由学園の羽仁とも子，救世軍の山室幾恵子などの仕事はよく指摘されるところである。また明治女学校教育の息のかかった最後の生存者ではないか

と思はれる野上弥生子（明治39年卒業）は，最近，明治女学校の自己に与えた影響を次のようにのべている。

「よその学校で学校生活を送っていたならば，決して今のような私にはならなかったろうとは思いますね。とくにものの考え方。それを育ててくれたのはやはりあの学校でしょう。いわゆる精神主義というんでしょうか。そこにウエイトがおかれていた。だから社会的な権威とか世間の思惑とか，習俗，形成とかいうことにとらわれないというのではないけれども，かかわりのないようなものの考え方をするようになったってこと，それは私ばかりじゃなく，いわゆる明治女学校風というものなんでしょうね。

それからやはり「神」というものの概念を知ったってこと，これは大きいですね。超越者というものの存在を考える場合に，仏教よりもクリスト教の神の方が，私には強くうえつけられているというのは，やはり明治女学校の感化でしょうと思います。[註27]」

また，このような精神主義あるいは，宗教的感化だけではなく，社会に対する物の見方をも養ったことを，次のように述べている。

「社会の動きに対して関心をもっていうのは，明治女学校の一つのいき方としても教えられたように思うのです。田中正造が政府に対策を要望した足尾の鉱毒事件，ああいう時，明治女学校は，学校をあげて動いていましたからね。それから星亨を殺した伊庭想太郎。あの人は，明治女学校の剣道，薙刀の先生だったのですけれど。公判のときなんか，生徒は，巖本先生に連れられて傍聴に行ったものです。ですから社会的な動きに対する関心は，自然にそれからもずっと続いたといえますね。[註28]」

野上氏は，非常に自由な学園生活の思い出を述べているが，一般には，明治30年代の公立女学校では，教育勅語の家族道徳観にもとづいた固苦しい女子教育が定着化しつつあった頃なのである。その時期にこれほどの自由な精神の息吹きを若い魂に植えつけた明治女学校は，やはり創設時の木村の自由・独立の精神がさいごまで生きつづけていたことを示していよう。

さて，明治の初期に米国へ渡り，異郷の地で得たキリスト教の信仰と女性観を，自己独自の方法と形態で，鹿鳴館期への抵抗の精神をもって，日本の土壌に植えつけようとした試みが明治女学校であるとするならば，明治20年代，つまり，明治前期における女子教育の長所と短所を十分に承知した時点で，米国に留学し，明治後期に入ってからの日本社会に留学成果としての女子高等教育機関実現に成功したのが，成瀬仁蔵であろう。彼は外国文化を移入する上で木村や巖本とどの点で思いを同じくし，またどの点で相違をみせたであろうか。以下の叙述がその解明の試みである。

第二節　成瀬仁蔵の場合

成瀬仁蔵については従来，女子教育研究家によって多くとりあげられてきたので，改めてここでふれる意味と理由が問われねばならないであろう。私がここで成瀬を追求しようとする観点は女子教育における外国文化移入という点において，木村や巖本とどのように比較できるか

ということである。木村と巖本のうち，木村は留学の成果として明治女学校の創設から閉鎖までの精神的支柱となった基礎工事を施し，他方，その遺産を見事に受け継いで開花させたのが巖本であった。それ故木村に思いを馳せることなくして明治女学校を論ずることができないということは，前節でみてきた如くである。しかし，成瀬との比較という問題を考えるとき，木村はあまりにも早く女子教育実践の舞台から退いているので，本節では主として女子教育の実践者としてほぼ同時期に活躍した巖本と成瀬をとりあげ，両者がキリスト教，及び女子高等教育という当時の外国文化の移入と摂取という問題にどのように対処したかを考えてみたいと思うのである。

まず成瀬仁蔵（1858〜1919）の経歴を簡単にのべよう。彼は，徳山藩士の家に生れ，山口県教員養成所卒業後，小学校長となるが，同藩出身の沢山保羅[註29]の影響でキリスト教にはいり，1878年（明治11），沢山を助けて大阪に梅花女学校を設立した。1882年（明治15年）同校を退いて奈良郡山で伝道に従ったが，1886年（明年19）新潟に移り，教育事業を志して新潟女学校と北越学舘を創設した。1890〜94年（明治23〜27）アメリカに留学し，女子大学設立を構想して帰国し，梅花女学校校長を勤めつつ，運動を進め，1901年（明治34年）東京目白に日本女子大学を創立し，没するまで校長として，最初の女子高等教育機関の困難な草創期の経営に当ったのである。[註30]

上にふれてある成瀬の明治23年から，27年にかけての留学という事実の持つ意味は独特である。女子教育研究という事を彼ほど明確に認識して留学したものは，明治以来おそらく彼がはじめてであったろう。当時，女子教育を専門とする研究は日本のみならず，アメリカにおいてさえも未開の分野だったのである。彼は渡米後，アンドヴァー神学院及びクラーク大学に学んでいるが，クラーク大学総長スタンレー・ホールは，成瀬に対して，「女子教育という部門でこれを一個の専門として研究した学者をまだ聞いたことがない」といって，成瀬の志を激励していることからもうかがわれるのである。[註31]「成瀬先生伝」は，成瀬が故国に残してきた病弱の妻の生活費のため，しばしば，「女学雑誌」[註32]にアメリカから投稿して原稿料を稼がねばならなかった旨を記しているが，我々は，彼の投稿した「観察記」によって彼が，マウントホリヨーク女子大学をはじめ，各地の女子教育機関を訪問，観察し，将来の女子大学設立の案にそなえていることを知るのである。[註33]

成瀬が常に日本の女子高等教育機関の青写真を頭に描きながら，実地に海外文化の摂取に努力したのにたいして，他分，巖本は，間接的なマス・メディアによって，外国文化を吸収しようとした。巖本の欧米女子教育の状況についての広範な知識は，次のような欧米の新聞雑誌類の定期的購読によっていた。

1. Godey's Lady's book
2. Harper's Magazine
3. Harper's Bazar

4. Harper's Weekly
5. Ladies' Monthly Review
6. Our little Men and Women
7. Woman's journal
8. Woman's work
9. The Lady
10. Queen
11. British Work-woman
12. Girl's own paper
13. Yoring Lodies Journal 註34

巖本は，欧米の女学についての貪欲な知識欲を満足さすべく，「英米にあらゆる女学上の新聞雑誌及び之に関係したる種類をも大抵，注文した」のである。註35

この両者の行動の相違は，単に，一方が直接に外国文化を摂取するため留学し，他方が，それを間接的におこなったということ以上の意味がある。成瀬が留学していた明治23年から27年までは，欧化時代が条約改正の失敗と共に，人々によって否定され，反動的な保守思想が，その機に乗じて勢力を加えていた頃であった。女子教育界も，このような社会変化の例外ではなく雑誌「女鑑」の創刊にみられるように，儒教的婦徳にもとづいた教育観が主唱されはじめ文字通り，新旧，東西の価値観，道徳観，教育観をめぐって，混乱をみせていたのである。成瀬が留学の一大決心をしたのも，このような社会的状況とは無関係ではなかった。熱烈なキリスト教徒であった成瀬は，この混迷を自分の中にも見出したことであろう。日本の，伝統的婦人観と成瀬のキリスト教による婦人観との間には，何の連脈もなかったのである。明治19年の新潟女学校創設以来，その校長として，この反動期のキリスト教主義女学校の経営の苦しさを身をもって経験したであろう成瀬は，その苦境を，日本の土壌にふみとどまったまま乗り越えるのではなく，再出発をめざして，留学という形でのりこえたのである。不振のさなかに成瀬に去られたあとの新潟女学校はこのようにして，明治26年，閉校の運命をたどることになったのである。「成瀬先生伝」によると，彼が留学を決心した動機は教育機関についての二つの要件を明確に把握することにあったとしている。その一つは学校の「外形的消極的要件」である。つまり学校機関が世の批判と風潮に超然としてその理想の精神を完遂するためには，どのような学校経営をおこなえばよいかという問題である。そして世に超然と独立しているためには，どのように経済的基礎をかためるか，或いは，どのようにして確固たる組織的機関とするべきかなどという研究テーマが成瀬をゆさぶったということは，「成瀬の強い意志の力のみでかろうじて存続していた」註36といわれる新潟女学校を考えてもたやすく想像されるところである。またもう一つの要件，つまり，学生にバックボーンとなるものを与える「内容的積極的要件」は，成瀬によると宗教ということなのであり，当時の反キリスト教的な風潮の中でもう一度，「時

代的要求に応ずべき宗教の本質，信仰の内容如何」を把握することが彼の教育実践上において切迫した問題だったのであり，また解明すべく挑戦された問題でもあったわけである。このような成瀬の姿が「時代の舞台の廻転に直面して活路を見いだすべくアメリカに渡った成瀬は，やはり真剣に生きる道を求めた人であったのであろう」[註37]と青山なを氏によって表現されているように，まさに，彼の留学決行は，背水の陣なのであったろうと思われるのである。[註38]

このような成瀬の行動にくらべて，巖本は，明治20年代どのようにしてこの苦境をのり越えたのであろうかという問題があるが，このことについては，すでに木村熊二の項で詳述したので繰り返さない。巖本は，懸命に中正主義を唱え，明治女学校の教育理念が終始，どこにあるかを述べ，進歩的立場を堅め，またその防衛にも努めたのである。[註39]そして，このような開明的女子教育観を維持しつづけた巖本の努力は，勿論高く評価さるべきであるが，その背後に，創設者木村熊二の「澄明な史的洞察力と純潔な詩人的直観力による思索の力があった」[註40]のだから木村の重さも，忘れるべきでないことも前述したところである。明治20年代の女子教育の不振の中で，一人，「女学雑誌」上で，自由で開明的な女性観を主張しつづけた巖本と明治女学校の存在を，その自己の創設した女学校の閉鎖を十分承知の上でアメリカに去った成瀬と対比する時，我々はどう考えるべきであろう。成瀬も巖本も逃避的態度でなく，みずから最も有効であろうと信ずる方法を積極的に実行した点では，一致している。しかし，明治20年代だけをとりあげて考えてみた場合，巖本の善戦は十分評価さるべきであろう。神戸女学院同窓会誌「めぐみ」には，次のような便りを出しているがこれは世の風潮に左右されない独立した教育方針を持つ「中立主義」[註41]の至らしめるところであったろうと思われる。

「昨年来の件よりか，或は人心の倦みしが為か大に不振の有様，或女学校の如きは三分の一に生徒の数を減ぜしといふ或は如此ならざるも多少の減数にて教師も不用といふ有様にて実に遺憾千万に御座候先づ其内に明治女学校の如き最も世上の好評を得，世上の不振中にも独り栄え居候様子なり」[註42]（明治24年２月）

さて成瀬はアメリカ留学によってその宗教観に大きな変化をみるようになったことは注目するべきである。青年時代に沢山保羅によって導かれて入信した彼が十余年の熱烈な伝道時代を経てキリスト教国におもむいてからその狭い意味での信仰を失ったのである。在米の中頃まではそれほどの動揺をみせなかった彼の信仰が，滞米２年後は，「その教界一部の自由な批判的見地のために，又，科学的哲学的修養のために」[註43]，大きく動揺したのである。この「教界一部の自由な批判的見地」というのは，おそらく19世紀から第一次世界大戦直後までプロテスタント神学界をつよく支配した自由主義神学（liberal theology）[註44]のことであろう。成瀬自身は，在米中に接した社会学の影響を強調している。

「私の宗教思想に大なる変革を持ち来した力は科学である。殊に私がアンドヴァーで研究した社会学である。その以前の私は熱烈なるクリスト教信者であり，思想としては，形而上学的，神学的哲学であったのであるが，それを破ったものは，科学殊に社会学であった。私は今後の信仰といふものは，独断的なク

リスト教のみではできない。同様に他の宗派のみでもできないと考えたのである。併し私にはその旧信仰と新解釈とが，十分に調和統一して一つの信仰内容を作ることができたのである。」[註45]

成瀬はかくて汎神的傾向の濃厚な信仰内容を得て帰国するのである。また成瀬はその信仰内容において，William James[註46]（1842～1910）の主行主義の影響をうけており，その点でも木村熊二や巌本善治の明確に福音的な十字架の贖罪を信ずるプロテスタントの信仰とは，はっきり区別されるものであった。そして，ここでは詳述する余裕はないが，巌本の常識的キリスト教観は，木村熊二の正統的福音信仰によって，常に，牽制されていたのである。[註47]

明治20年代に入ってから，わが国にも，ユニテリアン派や自由神学が伝えられ，布教活動をはじめており，とくに自由神学は，組合教会に影響を与え，小崎弘道，金森通倫，横井時雄などもその影響をうけた。常識的キリスト教観の持主であった巌本が，このようなキリスト教界の動きに影響される可能性は皆無ではなかったろう。それにもかかわらず，よく明治女学校のキリスト教の特色をまもりえたことは熊二という土台の重さを感じさせるのである。巌本が，わが国のいわば四面楚歌の状況の中で，よくキリスト教をまもり通したのに対し，伝道者，牧師として活躍した成瀬が，キリスト教文化に支えられたアメリカでその信仰を失っていったのである。

このように巌本と成瀬は，興味ある対照を示す時代の代表的女子教育家であるが，この二人をとりあげて比較し，その特色を論じている者がはやくも明治35年にあらわれているが，それは鳥谷部春汀[註48]である。春汀は，「日本の女子教育家成瀬仁蔵氏と巌本善治氏」と題して両者の教育観をのべ比較している。春汀の論によれば，成瀬の功績は，「其の事業の頗る困難なりしに拘らず，将た其の声望の未だ教育社会に重きを為さざりしに拘らず，曽て政府の力を以てすら尚ほ経営せざりし女子大学を創立して日本の女子教育に一紀元を開きたり。其の功や亦多とせざる可けむや」[註49]といったところにあり，巌本の功績を，「毫も外人の援助を借らずして全く邦人の手に依りて成立したる私立女学校は疑ひもなく，明治女学校を以て開祖と為さざる可からず」[註50]と表現している。また成瀬の「良妻賢母論」と，巌本の「完全なる女性論」[註51]との比較を論じて，前者の論は「学校を以て婚姻の準備を修むるの場所たらしむる所以にして巌本氏の所見と根本の相違あるを知る可し」[註52]としている。巌本の女性観の方が成瀬よりスケールの広いことをいわんとしているのであろう。しかし，その事業の才となると，成瀬の方が優れていたのだとして次のように述べている。

「唯だ彼が其の管理せる明治女学校をして更に一進境（ママ）を開かしむるの計画を立つる能はざるに際し，突然関西より崛起（ママ）したる成瀬氏は忽ち女子大学設立の功を牧む，その事業の才は終に成瀬氏に及ばざるものの如し。」[註53]

このような両者の相違にもかかわらず，女子教育における無批判な欧米模倣を否定し，ミッションスクールを批判してわが国独自の教育を模索した点においてこの二人の開明派は一致し

ているのである。次の文は明治40年に「開国50年史」の中で成瀬が執筆した一部であるが，巖本の筆かとみまがうほど思想的に似ている。

「此基督教的婦人と云へる理想の内には，確乎たる敬神の念をはじめ種々の長所あるにも拘らず，当事者たるものが我国の実状に通ぜざるが為，我邦婦人をして，直に欧米の婦人たらしめんとし，我社会と相容れざる所ある洋化主義教育たるを免れず。輓近に及び，多少基督教女学校が我国情と相融和するの徴候を示すに至りりたるは賀すべきことなりと雖，尚，主客本末を転倒したる教育主義と云はざるべからず何となれば自国の教育なるものは決して他国の歴史，風習のそれにあらずして必ずや自国の実情を基礎とせざるべからざればなり」[註54]

さて春汀の表現しているように，成瀬の方が事業の才に一歩長じていたが，巖本もよくその事業に協力しており，「女学雑誌」上で，成瀬の女子大学設立計画を「快心の事なり」と推挙している。[註55] しかも成瀬は名前こそ女子大学とつけたが実質はそれまでのミッションスクールの高等科，あるいは明治女学校の高等科などと年限からみれば変らないのである。その意味では巖本の明治女学校高等科の方がはるかに早く高等教育をうけた女性を送り出していたのである。しかもその卒業生の中には，自ら女子大学の必要を学問的に解明しようとする女性すら生み出されていた。例えば，明治女学校高等科を明治26年に卒業した富田八重子は，その卒業論文に女子高等教育をあつかっている。この論文において，彼女は，従来の女子高等教育反対論を列挙し，それに対して論理的に反証している。[註56] そして最後に彼女は，従来のミッションスクールでの高等教育への努力を認めつつもなおそれでは満足できないとして「日本的女子大学」の設立を望んでいるのである。ここで思い至るのは，木村熊二が明治女学校の生徒を励まして，マウントホリヨーク女子大学の設立者メアリーライオン（Mary Lyon）を紹介しているということであり，富田八重子のような純粋で自由な考え方も，木村や巖本の精神的励ましによって育てられたものであろう。この事実が示すことは，明治30年代の成瀬の日本女子大学設立という事業に対比して，巖本は，すでに明治20年代に女性自らの精神に，開明的啓蒙的な目ざめを与えるという役割を荷ったのだということであろう。

第三節　む　す　び

以上みてきたように木村，成瀬，巖本は，アメリカ文化を独自の思想のなかにくみいれ日本社会に定着化させようとしてきたのであるが，ここで，彼等の実践を，外国人宣教師によるミッションスクール活動と比較しつつその特徴を総括してみたい。

まず宣教師によるミッションスクールが彼等の母国であるアメリカのフィーメールセミナリー（female seminary）を原型としてとりいれておりそれがカリキュラムや教育目的などに如実にあらわれていることについては別稿で指摘したとおりである。[註57] それにくらべて，日本人留学生たちはアメリカの女子教育機関をそのまま模倣しようとはせず，むしろ，学校経営上の部分的なものかあるいは，開明的な女性観といった精神的側面の方を取り入れたと思えるのであ

る。例えば成瀬は，滞米中，東部有名女子大学をはじめ，ハーヴァード，シカゴなどの男子私立大学や共学州立大学などを訪れ後の日本女子大学設立時の教育組織や教育内容などの設定の上に大きな成果を獲得したのであるが，他方，彼の日本女子大学設立趣意書（明治27年）で強調していることは，「吾人が創立せんとする女子大学は決して漫然，欧米の女子高等教育を直写し」[註58]ているのではないということであり，むしろ，「本邦の国体国情に適応する女子教育を施」[註59]すということであった。

木村熊二にしても自ら在学した私立共学大学における女子学生の存在を目のあたりにみて日本女性への同情を深くし，開明的女性観を抱くにいたるところに彼におけるアメリカ文化の影響は明白である。しかしその彼もミッションスクールの持つアメリカの直輸入的教育には強く批判的であったことは既に詳述したところである。この木村の精神を忠実に受け継いだ巖本は，明治24年にミッションスクールに多い英文の教科書を批判して女子教育の邦語邦文による教育を主張し，自ら日本語による女子修身教科書の編著にたずさわっている。また彼は地方の女子中等教育機関における教科内容の標準を示しているが，それによると英語が週に一時間しかないのにたいして，理学三時間，文学（和漢学）三時間，女工（裁縫・編物）四時間，体育三時間その他となっている。[註60]この時間数は当時の英学偏重のミッションスクールとは非常に対照的で日本の地方都市や農村における実際的要求をくみあげて，教科内容を設定しようとする努力がみられよう。宣教師たちの直輸入的教育にたいして，日本人教育者たちの外国文化摂取とその移入は，日本社会の諸条件を考察に入れた上で主体的にかつ自覚的におこなわれたといえよう。

日本人教育者たちのこのような態度と実践の理由は，木村熊二によって典型的に表現されているように宣教師が日本を理解することあまりにも少ないということへの憤りからであり，また他方，一部日本人の示す外国文化摂取の上での軽薄さ，皮相さへの反発であり，西欧文明の真の基盤となっている精神文化に対する無理解への憤りからなのである。このようなミッションスクールへの不信感から生れた彼らの教育実践が，ミッションスクールよりも自由な精神的雰囲気を生みだしたのも必然的結果であろう。その好例として，相馬黒光の経験があげられる。彼女は明治20年代にミッションスクールの宮城女学校で日本的カリキュラムを要求して学内ストライキに参加したため退学を余儀なくされ，横浜のフェリス女学校に転校するが，ここでも狭いキリスト教主義人間教育にあき足らず，明治女学校に移ってはじめてその若い自由な魂を存分に燃焼させうるのである。宣教師の日本を理解すること少なしとして明治女学校を設立した木村熊二の精神は，相馬黒光のような経験を通して歴史に生かされていたことがわかるのである。

これらの対照的性格を生みだすもといとなったものは，日本人教育者がキリスト教に独自の意味づけを持っていたこと，そして，キリスト教に対して変相自在な態度を有していたことにあるようである。その典型的な例として成瀬の場合がある。彼はアメリカ留学から帰ったとき

には，その留学前の熱烈な殉教者的信仰は消え失せており，汎神論的傾向を濃厚にした信仰内容に変質していたのである。従って成瀬の設立した女子大学では純粋なキリスト教精神をもはや伝えないものになっていたのは当然である。また木村熊二にしても，宣教師のようないわばborn Christian 的な信仰ではなく，その入信の際には，それまでの精神的支柱となっていた儒教との対決を経て苦しみのうちに新生したキリスト者なのである。このような経歴を持つ彼が，キリスト教的世界観を当然のこととして，何らの批判的思考をへずに教育をしようとする宣教師の教育法を受け入れ難かったのもうなづけるであろう。

勿論，ミッションスクールがそのアメリカ文化の直輸入的態度を終始維持することが可能ではなかったことについては，既に前号の紀要論文でふれたとおりである。その点においてこれらの日本人教育者の教育実践が，宣教師にも影響を与え，ミッションスクールを日本に定着させていくうえに間接的な作用力をもったという点も看過しえないところであろう。

註

1. この研究は，東京女子大学付属比較文化研究所「紀要」に掲載され，昭和32年の第4巻から昭和41年の第21巻に及ぶまで9年間をかけて研究されたものである。
2. 青山なを；「木村鐙の生涯と明治女学校」（『明治女学校の研究』その九）東京女子大学付属比較文化研究所紀要，Vol 16，昭和38，p. 40
3. 青山；「木村熊二と明治女学校」前掲書，Vol 8,昭和34，p. 107
4. 按手礼（ordination）とは，キリスト教で聖職任命の儀式をいう。監督または長老がその手を候補者の頭上に按じて聖別する。
5. 青山；上掲書（Vol 16），p. 45～46
6. 青山；前掲書，Vol 16，p. 52
7. 青山；前掲書，Vol 16，p. 55
8. 青山；前掲書，Vol 16，p. 56
9. 青山；「明治女学校の系譜」（『明治女学校の研究』その十）Vol 17，昭和39，p. 29
10. 青山；「木村鐙の生涯と明治女学校」（『明治女学校の研究』その八）Vol 14，昭和37，p. 21～22
11. 青山；上掲書（Vol 17）p.30
12. 青山；上掲書（Vol 16),p. 54
13. 青山；「明治女学校の発足とキリスト教」上掲書（『明治女学校の研究』その11）Vol 19,昭和40，p.19
14. 青山；「木村鐙子小伝」と「木村鐙子の伝」（『明治女学校の研究』その5）Vol 9，昭和35，p. 38～40 明治女学校の設立の理由については，この「木村鐙子の伝」と全く同じ内容のことを，その「設立趣意書」の中にしるしている。（Vol 19，p. 16を参照）
15. 青山；上掲書（Vol 19）p. 14
16. 青山；前掲書，Vol 19 ,p. 14
17. 青山；上掲書（Vol 16）p. 6
18. 青山；前掲書（Vol 16）p. 7

19. 青山；上掲書（Vol 19）p. 48
20. 青山；前掲書（Vol 19）p. 49
21. キリスト教主義女学校を設立年にわけて数えてみると，次のようになる。

1870～1877（明治3～10）13校

フェリス，A六番，横浜共立，B六番，青山，梅香崎，神戸，平安，駿台，原，桜井，同志社，立教

1878～1881（明治11～14）5校

梅花，活水，永生，成美，高梁順正

1882～1885（明治15～18）6校

遺愛，東洋英和，ウィルミナ，福岡，北陸，明治

1886～1889（明治19～22）24校

広島，宮城，弘前，松山東雲，捜真，岡山山陽，静岡，北星，大江，香蘭，新潟，鳥取，大阪一致，普連土，共愛，熊本，名古屋清流，広陵，宇都宮，米沢英和，高知英和，金城，山梨英和，小樽静修

このように，相ついで設立された mission school は，明治19年において30校，20年に37校，21年45校，27年には52校と増加しているが，他方，官公立女学校は不振をきわめ，明治19年9校，明治27年においてすら14校にすぎない。（「日本におけるキリスト教学校教育の現状」p 67）

22. 青山；上掲書，Vol 19，p. 52
23. 例えば次のような論説がある。「女学雑誌」第157号（明治22年4月）「何をか中正の旨議と云ふ」。第250号（明治24年1月）「日本女学読本の編纂」中「潮の干満」等。
24. 「女学雑誌」第323号，「明治女学校の成立・性質」明治25年。
25. 青山；上掲書，Vol 19，p .32
26. 青山；前掲書，p. 46
27. 竹西寛子「妻と母と作家の統一に生きた人生」―野上弥生子編―（「婦人公論」1967，1月号）pp. 92～107
28. 竹西；前掲書，p. 103
29. 沢山保羅（嘉永5～明22，1852～1889）略伝。

明治11年梅花女学校設立，当初日本人2名，米人2名，生徒15名。大阪における女子教育の濫觴，明治10年浪花教会を建てる。日本教会費自給論（明治16）をとなえる。自給とは，自ら入費を払うことにして，日本教会の事業，即ち教会，伝道，学校等の働を維持するに，日本信徒より出金して，全く外国伝道会社より金銭の助けを受けざるを云ふ。教会己に克ち，困難より牧師に給するなれば，牧師も己に克ちて其の困難を忍び其の互の克己よりして其の間に愛を益すに至る。之に反して教会自ら牧師に給するにあらざれば，おそらくは只雇人の如く見做し，牧師も亦，己に克つの精神に乏しく，一致協力に必要なる愛情を欠くに至らんことをおそれたのである。（「植村正久とその時代」2，p. 248～249）

30. 京都大学文学部(編)「日本近代辞典」p. 440
31. 仁科節（編）「成瀬先生伝」昭和12年，p. 131
32. 明治21年当時において，女学論の流行につれて，女性向けの雑誌は続出したが，その雑誌名は次の如くである。

女学雑誌（女学雑誌社）明治18～34（516号をもって終刊）

いらつめ（成美社）

日本之女学（博文館）

貴女之友（東京教育社）

婦人教会雑誌（婦人教会）

東京婦人矯風会雑誌（福原祐四郎）

女新聞（女新聞社）

婦人教育雑誌（上毛婦人教育会本部）

大日本婦人衛生会雑誌（婦人衛生会）

（「女学雑誌」明21，第124号 p. 96 より）

このうち，主要な役割を占めていたのが，女学雑誌，いらつめ，貴女の友，及び日本之女学の4誌である。このうち，女学雑誌は発刊が最も古く，女学のあらゆる分野を含んでいるのにたいし，「いらつめ」は文学的色彩が強く，「貴女之友」は実用を主とし，「中以下の婦人の友」となっていた。

33. 「成瀬先生伝」p. 120

34. 「女学雑誌」Vol 3，p. 116

35. 前掲書，p. 116

36. 「成瀬先生伝」p. 100

37. 前掲書，p. 100

38. 青山；上掲書，Vol 19，p.34

39. 青山；前掲書，p. 32

40. 青山；前掲書，p. 34

41. 「女学雑誌」創刊号に，巖本は「希ふ所は欧米の女権と吾国従来の女徳とを合せて完全の模範を作り為さんとするに在りき」とのべているが，彼のいう中正主義・中立主義というのは，進歩的婦人解放の立場をとりながら，伝統尊重の自主的態度をもかねあわせていることである。

42. 「めぐみ」上掲書，明治24年2月，第2号

43. 「成瀬先生伝」p. 138

44. プロテスタント神学は，ふつう四つの分科にわかたれる。すなわち聖書神学 biblical theology, 歴史神学 historical theology, 組織神学 systematic theology, 実践神学 practical theology となる。これらの分科における研究が，この世の学問一般の用いる研究方法を借りてきて，これをキリスト教に適用するという仕方による場合，それが，自由主義神学 liberal theology とよばれる。わが国キリスト教に，自由主義派が入ってきた経過は次の如くである。

(1)普及福音新教伝道会（Allgemeine Evangelisch-Protestantischer Missions Verein）

明治18年，ドイツ人 Spinner が来日，19世紀の自由神学の影響をうけたドイツ，スイスの神学者，教会人が明治15年に原教会なき伝道会を組織し，自由神学によるキリスト教の伝道を決議したのである。明治20年に普及福音教会を設立した。

(2)ユニテリアン（U. S. Aより）

1887年，A. M. Knapp を日本に送ったことにはじまる。三位一体論（Trinity）にたいして，神の唯

一性（Unity）を主張し，イエスの人間性の主張をした。明治23年雑誌「ユニテリアン」の発刊。安部磯雄に影響した。

(3)アメリカン・ユニヴァーサリスト教会

G. Perin が来日して，宇宙神教教会を作った。予定救済説にたいして，普遍的救済を唱う。組合教会内で，自由神学の影響は殊に大きく，小崎弘道，金森通倫，横井時雄などに影響した。

45. 「成瀬先生伝」p. 157

46. 成瀬は，W. James のプラグマティズムの影響をうけたが自らは，これを，主行主義と名づけている。成瀬によると「人間の外から受けた経験と，内から発する経験との全体をまとめて，その統一をはかるのが主行主義であるから，その点からしては哲学であるが，しかし，単なる一つの哲学に止まらず主行主義は世界の宗教をすべて同化し，かつ多くの反対の立場にある哲学をも調和することが出きる」とした。（菅支那;「成瀬仁蔵とウィリアム・ジェームス」pp. 97〜137）

47. 青山；上掲書，Vol 19，p. 30

48. 鳥谷部春汀；「春汀全集」（第二巻）に集録されている。論文「日本の女子教育家」（成瀬仁蔵氏と巖本善治氏）を指す。

49. 鳥谷部；前掲書

50. 鳥谷部；前掲書

51. 巖本の「完全なる女性」論，あるいは「真の女性」論については，筆者の修士論文 p.44〜45に論じた。

52. 鳥谷部；上掲書

53. 鳥谷部；前掲書

54. 「開国50年史」（上掲書）p. 849〜887

55. 「女学雑誌」明治30年，438号，p. 199

56. 「女学雑誌」明治26，Vol 17，p. 241

57. 拙稿「明治前半期のキリスト教女子教育にみる外国文化摂取の一形態」（京都大学教育学部比較教育学研究室発行「比較教育試論」第三集）

58. 「成瀬先生伝」p. 185

59. 前掲書，p. 185

60. 巖本善治「吾党之女子教育」明治女学校出版，明治25年